

第25回Kozoomサロン28 テーマ「不思議に思う出会い」について

清水健二

子供の頃は不思議に思うことや、分からないことは親に聞けば、大抵それなりに教えてもらえたが、大人になるに連れ他人に問える内容は相手を困らせ無いよう配慮し、自分も恥ずかしい思いをしたくなく、安易に訊ねる事は少なくなった。それでも私は「聞くは一時の恥」と自認し、好奇心も強い方だったので、よく質問する方だったと思っている。この歳になっても「知らない事は知らない」とはっきり言う方だと思っている。それにしても分からないことや不思議に思うことだらけだが、自分でも色々調べる楽しみを失っていない事を有り難いと感じている。

「世界7不思議」とか「世界不思議発見」とか話題は尽きないし、自然が醸し出す異様な現象、例えば蜃気楼などは科学的に解明されているし、心霊写真等は光の屈折による現象で生ずるなど分かって来ているので不思議と思わなくなってきた。

科学の進展と急速に普及した情報社会では、昔のように科学的説明の乏しい時代に比べ不思議な事象は格段に少なくなっているように思う。それでも古代建造物は、建築技術の発達していない時代にどうしてこんな広大で高層な建造物を作れたのかと言う不思議さは、エジプトのピラミッドや、イタリアのコロッセオ等々の遺跡を訪ねた時に感じたものである。重機や荷役機械の無い時代に、人力だけで築造した工法はどんなものだったのか推測するだけでも楽しい。

17世紀後半にニュートンによって確立された力学が、現代建築の構造設計の基本になっているが、そんな理論の確立されていない遥か昔の人々が堅牢な建造物を造り上げた知力や能力に驚くばかりである。また「世界不思議発見」に必ずでてくる、ペルーのナフカの地上絵は、200余の様々な文様や、動物の線画等が誰が、何の目的で、広大な絵をどうして描いたのか、しかも何百年も風化されずに存在する事等、未だ謎に包まれていると言うから不思議である。世界中というより、地球上の摩訶不思議と言われる数々の事象は科学的に今後も解き明かされて行くだらう。

私は若い頃に奈良県の明日香村で出会った石造物に興味をもち始めて、日本の古代史や小説等をよく読んだ。そして休日等にはよく飛鳥の地を訪ねて見聞した事等から、不思議の出会いを取り上げ紹介してみたいと思う。

飛鳥の地は古代大和政権の中心地で、わが国が本格的な国家建設に向かって大きく踏み出した事はご存知の通りである。物部氏と蘇我氏との抗争を経て、仏教が日本に伝来すると共に大陸文化が渡来し、数々の遺跡が歴史を語り現在でも発掘され続けている。その飛鳥には謎の石造物が多く、誰が何時、何のためにつくったのか、はっきりしたことは分かっていない。野辺や古道の脇、古墳や寺の中に、1400年の歳月を経てひっそりとたたずんでいる。

「亀石」や「猿石」の類が多く、他にも「酒船石」や「益田岩船」等、歴史学者等が諸説を発表しているが、今なお推測の域から出ていない。渡来人のよってもたらされた文化の影響を受けていることは否定できない。松本清張氏は古代ペルシャの宗教ゾロアスター教と結びつけるなど、うがった説を唱えているほどである。

「鬼の俎(まないた)」「鬼の雪隠(せっちん)」については、人食い鬼が旅人をつかまえて、俎板で料理し、食べたあと雪隠で用を足したというのが、この遺跡の奇妙な名前の由来になっているが、鬼の俎のすぐ下、道路をはさんで鬼の雪隠がある。この二つを組み合わせると、「俎」は古墳の石室の底部、「雪隠」は側壁と天井にあたり、これを組み合わせれば、花崗岩製の立派な石室になる。もとは古墳で地盤が崩れて石室の上部が落下してしまったと言う説は納得できるが、逸話は日本本来のユーモラスな伝説が多くて面白い。



飛鳥寺のすぐ東にある 飛鳥座神社正面



陰陽石

またこの地の中心部にある飛鳥坐神社(あすかにいますじんじゃ)には、境内に男根や女陰をかたどった陰陽石が点在しており、子宝を授かり、安産を願う性信仰が息づいている。石は注連縄を張りめぐらされているから自然崇拜の流れを物語っているのが判る。また村の道端に男根を思わせる石が堂々と突き立っていて「マラ石」とあからさまに呼んでいる。暮らしや信仰に結びつくものは明確に理解もできるものの、吉備姫の墳墓にある、四体の「猿石」についてはよく分かっていない。その背面に牙をむき、たてがみをなびかせて威嚇する怪獣が刻まれていて、平安時代の『今昔物語』や、鎌倉時代の『古今著聞集』に登場していて謎が残ったま



吉備姫墳墓内の猿石

まのようである。

日本最古の飛鳥寺の東南に板葺宮があり、蘇我家最後の入鹿を倒した壬申の乱(645年)の舞台となった跡地である。そのすぐ東の小高い丘にある「酒船石」は、長さ5・3m、幅2・3m、高さ1・2mの花崗岩で上部表面に、数個の丸い窪みとそれらを結ぶ細い溝が掘り込まれている。石はむぞうさに鎮座し誰でも自由に触れたりできる。酒造りに使用されたものか、庭園に水を引く施設の一部ではないかといわれているが全く手がかりはないようである。

他にも飛鳥寺の近くにある石神遺跡から発見された石人像は、岩に座った男性に女性が後ろから手をそえている。男性の足元から口まで内部に細い管が通り、途中で女性の口にも分岐していることから、噴水施設であったと推測されている。衣装は飛鳥調のものであるが、風貌から男女のモデルをペルシャやインドに求める説もあって、飛鳥資料館には実物のほかに、噴水装置として復元したのがある。異国的な実に見事な彫刻像である。

古代の生活や文化は遺跡からの埋蔵物から知ることができるが、飛鳥時代には仏教と共に大陸文化が渡来し、異文化として謎に包まれたまま遺物として残っているものが多々あり、想像するだけでも楽しくロマンもある。

さて、実体のあるものに不思議があっても、やがては解明される期待はある。しかし実体のない妄想から来る不思議はどう理解すべきだろうかと思う。例えば、全く意識したことのない事象を夢の中に見る不思議は何なのだろうかと思う。ジークムント・フロイトの「無意識論」を勉強すればいいのだろうが、とても難しくついていけそうもないので諦めている。

私の経験から一つ、非科学的な話を紹介しようと思う。大阪と奈良は生駒山系が県境である。この山系の東に矢田丘陵が横たわり、南下すると斑鳩の里・法隆寺に入るが、富雄に霊山寺という古寺がある。寺の南は



酒船石(友人達と石造物探訪)
(後方右から2人目は私)

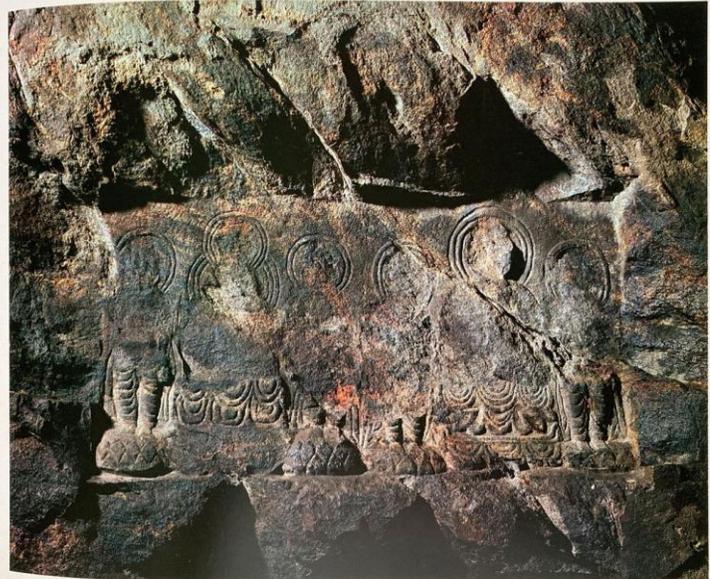


石人像

現在「こどもの森」が広がっているが、まだこの森が開発されていない30年以上も前、山中は樹林の生い茂るところだった。私が大和の古寺探訪に興味を懷いて、独りで山歩きをしていた時代に、この地に滝寺という名の古寺があることを知って、そこに白鳳時代(650~700年頃)の摩崖石仏群が残っているというので山中を探し求めやっと見つけた。

ところが寺は廃墟となり建物の基礎だけが雑草の中に見えた。比較的広い面積の敷地は三方が木立に囲まれて鬱蒼とし、一方は直立した岩壁だった。そこに目指す摩崖仏があったが、風があつて木漏れ日が動き何か異様な雰囲気を感じたが、そのまま私は摩崖仏の前まで進んだ。その昔、火災にあつたらしく火焰で像は剥落し、欠落していて色も赤茶けて表情は見ずらかった。カメラを向けて写真を撮ろうとした時、突然背後に誰かが立っている気配がしてゾクツとした。カメラのシャッターを切ろうとしてもシャッターが下りず、指が硬直したようで切れなかった。靈感に襲われ戦慄がよぎった。身体も強ばみやっと一息入れてここを離れたが、幸い転倒することなく下山できた。岩に刻まれた仏達は焼け爛れたまま放置され、供養する人も来ず身勝手な私に写真を撮らせなかったのかと、全く非科学的なことを想像させる出来事だった。それ以来この地を訪ねていないが、今はこどもの森の中で遺跡として大切に守られているだろうことを願っている。

不思議を思わせる出会いを、実体の遺跡と実体の無い幻想について綴ってみたが、特に後者は全く手に負えない不思議の世界である。絵画や彫刻、写真等芸術の領域にシュールリアリズムと称されるものに、私も時に面白がって手をつけているが、これも不思議の世界の延長線上あつて、それを好み得意とするアーティストがいるから世の中は様々である。とまれ、不思議の世界があるから人生は生きていく楽しさがあるのだろうなと思っている。



入江泰吉写真集「大和ののぼとけ」より

滝寺の白鳳時代の摩崖石仏群

令和4年7月記